

福島県喜多方市から市場視察に

企業家ら県連日本祭りに

ブラジル福島県人会（永山八郎会長）からの呼びかけにより、7月の県連日本祭りにあわせて喜多方市物産協会関係者ら3人が市場調査に初めて訪れることになった。

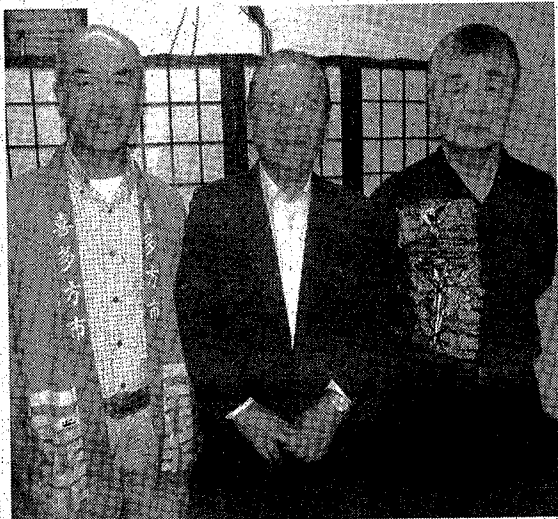
来伯するのは佐藤彌右衛門さん、五十嵐隆さん、武藤啓一さんら3人。中でも佐藤さんは、江戸中期の寛政二（1790）年に創業した老舗中の老舗の造り酒屋「合資会社・大和川酒造店」の社長だ。

五十嵐さんも、1931（昭和6）年創業の「喜多方の平打ち太麺」で有名な五十嵐製麺の取締役だ。武藤さんは、JICAシニアボランティアとして2年前から野球指導に来ており、7月1日に任期を終えていったん帰国した。17日には他2人とともに再来伯するという強行軍だ。4日間ほど滞在し、県人会および業界関係者と懇談する。

大震災が引き起こした福島第1原発事故の風評被害の払拭を目指して2月に開催された初の「在外県人会サミット」の折に、曾我部威事務局長が喜多方市を訪れて「ぜひブラジルへ」と依頼したところ快諾され、実施の運びになったという。永山会長は「いつも県人会は母県に世話になるばかり。今回はお返しのためで世話させてもらう」と意気込む。

レストランを経営する永山会長だけに「今まではヤキソバだが、これからは日本食はラーメンの

時代。県人会の喜多方ラーメンを盛り上げ、郷土の企業のみなさんと手を組んで郷土文化を普及したい」と語った。



武藤さん、永山会長、曾我部事務局長



福島県人会 喜多方ラーメン完売 佐藤、五十嵐両氏は福島物産PR

日本祭り

第16回日本祭りでは、来一ていた「郷土食コーナー」。場者の多くが目当てにし、ブラジル福島県人会（永山八郎会長）では、今年も母国福島の名物「喜多方ラーメン」を全面に打ち出す姿勢で臨んだ。

当日店頭で並んだ曾我部事務局長、武藤氏、佐藤氏、五十嵐氏（左から）は、今年も母国福島の名物「喜多方ラーメン」を全面に打ち出す姿勢で臨んだ。曾我部事務局長による「喜多方ラーメン」の試飲は、同事務局には「また来

年も販売してほしい」といった声が電話で寄せられているという。また同ブースでは、東日本大震災の風評被害払拭を目的に来伯した「大和川酒造店」代表社員

の佐藤彌右衛門（やうえもん）氏と「五十嵐製麺」代表取締役の五十嵐隆氏（りゅう）が、当日は店頭でPRをした。佐藤氏は、日本から携えた日本酒4銘柄の試飲を来場者に促したほか、五十嵐氏も自社製品の乾

麺や生麺の展示を行った。同ブースを訪れた来場者に、こうした風評被害払拭に向けた取り組みについて尋ねると「実際に体験してみないと分からないところもあるの

で、こうした場を設けるのはとても良いことだと思ふ」といった声が聞かれた。なお、両氏はサンパウロ滞在中に輸入代理店や小売店などを回り、海外展開に向けて、ブラジルにおける日本食の現状と動向も調査した。五十嵐氏はその手応えについて

「訪れたお客さんからは、展示品を指差して『販売はしてないんですか』という言葉を多く掛けられ

た。製品を輸入する形などを検討しながら、前向きに考えたい」と話した。

一方、佐藤氏は「ブラジルへの輸入に当たって、お酒の品質保持に懸念があつたが、ブラジルにもお酒の知識と売り込む情熱を持つている人を見つけた。本物の日本酒の味を少しずつでも広めていければ」と話した。また、日本全国の酒造店を束ねる日本地酒協同組合の代表理事でもある佐藤氏は「日本へ帰っても、日本酒に興味を持っていて、業者に対して、日本全国の酒蔵の窓口として積極的に活動していきたい」と述べ、今後もブラジル

とのつながりを保つていく意向を示した。